

産褥1ヶ月の褥婦の母性意識と それに関与する因子

国立公衆衛生院

新道 幸恵 (Sachie Shindo)

東京大学保健学科母子保健教室

松岡 恵 (Megumi Matsuoka)

聖路加看護大学

高木 廣文 (Hirofumi Takagi)

東海大学病院

稲尾 公子 (Kimiko Inao)

東海大学医学部

藤井 明和 (Akikazu Fujii)

産褥1ヶ月の褥婦の母性意識と それに関与する因子

国立公衆衛生院

新道 幸恵 (Sachie Shindo)

東京大学保健学科母子保健教室

松岡 恵 (Megumi Matsuoka)

聖路加看護大学

高木 廣文 (Hirofumi Takagi)

東海大学病院

稲尾 公子 (Kimiko Inao)

東海大学医学部

藤井 明和 (Akikazu Fujii)

I 要約

産褥1カ月の初産婦の母性意識及びその関連要因を調べることを目的とし、妊娠初期より追跡を行っている初産婦259名を対象に、質問紙調査を実施した。

有効回答数は209例であり、各項目の単純集計処理の他に、因子分析により共通因子を探索した。計算には、東京大学大型計算機センターのHITAC-M280を主に用い、統計処理はSPSSを利用した。

対象者は、平均産褥1.2カ月の初産婦で、大学卒以上の高学歴者28%、有職者24%、核家族78.5%であった。

子供への愛着、すなわち母性意識や夫への愛着、夫の支援、があるとする割合は80%以上を占めていた。子供や育児への否定的な意識、育児疲れは15~30%に認められた。

母性意識と他の意識との関連性を χ^2 検定により検討した。子供への愛着は夫の支援と、子供や育児への否定的な意識は育児疲れと、女に生まれてよかったは子供や夫への愛着と、また現在の自分に満足は子供や夫への愛着や夫の支援とそれぞれ有意な関連が認められた。

因子分析により7因子が抽出され、累積寄与率は17.6%であった。各因子の意味はつぎのように考え

られた。第1因子は子供への愛着因子、第2因子は未熟な性格因子、第3因子は子供や夫を生きがいにする因子、第4因子は育児への困難感に関する因子、第5因子は夫への愛着因子、第6因子は夫の支援因子、第7因子は実母への愛着因子と考えられた。

各因子の母性意識との関連については、第1, 3, 5, 6, 7因子は母性意識に肯定的に、第2, 4因子は母性意識に否定的に関与するものと考えられた。

対象の各属性と抽出因子の因子得点の差を分散分析を用いて検討した。第2因子では職業がないよりもある母親で、第3因子では学歴が高いよりも低い母親で、第4因子では他の職業よりも事務職の夫をもつ母親で、それぞれ因子得点が有意に高かった。

II 緒言

女性が子供に対してもつ特殊な意識である母性意識は、出生直後からの母親との関係を中心とする生育過程の中で形成され、妊娠、分娩、育児という母親としての実体験をする中で発展するものといわれている。そこで、我々は、これまで、母性意識の形成や発展過程における関連要因や変化の過程を明らかにすることを目的に、成熟期未婚女性や妊娠期、産褥早期、の女性を対象に調査してきた。¹⁾²⁾³⁾今回は、産褥1カ月時の母親を対象に調査した結果のうち、母性意識の関連要因に関するものを中心に報告する。

Ⅲ 対象と方法

東海大学病院(以下A病院と記す)と聖路加国際病院(以下B病院と記す)で出産した産褥1カ月の初産婦で、妊娠期、産褥早期に調査した259名を対象に質問紙の郵送調査を行った。その調査時期は昭和59年8月～昭和60年1月までである。

調査内容は、すでに報告した妊娠期、産褥早期と同様であり、子供への関心、夫や自分の母親への愛着、自己感、母親との関わりを主とした生育歴などである。²⁾³⁾ 妊娠期、産褥早期に設けた分娩に対する心理的反応に関する内容は、質問内容が不適なものがあり、妊娠、産褥早期のものとは設問表現を変更し、全体で50項目よりなる質問紙を用いた。

分析は、有効回答数209(回答率80.7%)に対して、単純集計の他に因子分析を行った。主要な計算は、東京大学大型計算機センターのHITAC-M280を用い、統計処理は主にSPSSを用いた。

Ⅳ 結果と考察

1) 対象の特性

(1) 一般的属性

表1 対象の背景

本人の学歴	
中学・高校卒	51(24.4)
短大・各種卒	99(47.4)
大学・大学院卒	59(28.2)
計	209(100.0)
本人の職業の有無	
職業有り	39(18.7)
職業無し	170(81.3)
計	209(100.0)
家族構成	
核家族	161(77.0)
拡大家族	48(23.0)
計	209(100.0)
夫の職業	
専門・管理職	89(42.6)
事務職	45(21.5)
その他	75(35.9)
計	209(100.0)

有効回答数A病院80, B病院129, の計209例であり、結婚年数は平均2.07年、産褥日数は平均1.2カ月、学歴は大学卒以上の高学歴者が28%, 職業の有無では、有職者が24%, 家族構成では核家族が

78.5%を占めた(表1)。

(2) 母性意識等について

表2 主な項目の回答数と回答率

	回答数(回答率)		
	はい	どちらでもない	いいえ
子供と一緒にいると楽しい	192(91.9)	15(7.2)	2(1.0)
子供の身の回りの世話が楽しい	188(90.0)	20(9.6)	1(0.5)
私は子供が好きである	169(80.9)	35(16.7)	5(2.4)
夫が側にいると安心	193(92.3)	12(5.7)	4(1.9)
夫は心の支えになってくれている	181(86.6)	23(11.0)	4(1.9)
夫は子供が好きである	194(92.8)	10(4.8)	4(1.9)
夫は子供の世話をよくする	127(60.8)	55(26.7)	26(12.4)
夫からきれいだといわれたい	146(69.9)	49(23.4)	14(6.7)
夫は私の味方であって欲しい	191(91.4)	16(7.7)	2(1.0)
夫は私の気持ちを理解して欲しい	193(92.3)	13(6.2)	2(1.0)
実母のような母親になりたい	105(50.2)	76(36.4)	28(13.4)
私は他人の意見に左右され易い	62(29.7)	86(41.1)	61(29.2)
私はあきっぽい性格	56(26.8)	76(36.4)	77(36.8)
私は我がままな性格	108(51.7)	59(28.2)	42(20.1)
夫が生きる張合いである	168(80.4)	41(19.6)	0(0)
私の幸せは夫次第である	90(43.1)	89(42.6)	30(14.4)
子供が生きる張合い	96(45.9)	75(35.9)	38(18.2)
この子は手のかかる子である	30(14.4)	76(36.4)	103(49.3)
最近育児に疲れている	57(27.3)	71(34.0)	81(38.8)
赤ちゃんが泣くことが多くて困る	60(28.7)	69(33.0)	79(37.8)
子供の世話が煩わしい	42(20.1)	39(18.7)	128(61.2)
最近良く眠れない	68(32.5)	31(14.8)	110(52.6)
現在の自分に満足	112(53.6)	49(23.4)	48(23.0)
女に生まれてよかった	150(71.8)	51(24.4)	8(3.8)

注: ()内は%(209=100%)

子供に対する気持ちでは、表2に示したように約90%の母親が子供の身の回りの世話を楽しみ、一緒にいることを楽しいと感じており、その割合は「子供が好きである」よりやや高い。これは子供を好きと思わない人も子供の世話を楽しみ、一緒にいることを楽しいと感じていることを示すものと考えられる。すなわち、自分の子供を育児する過程の中で、母性意識を形成する場合があることを意味するものと思われる。

しかし、一方では、「この子は手がかかる」「子供の世話が煩わしい」と子供や育児に対して否定的な意識を持つ母親が15～30%認められる。それらの割合は、子供と一緒にいて、世話することが楽しいと思わないとする割合よりも高い。このことは、子供への愛着はあるが、時として育児の困難さを感じている母親の存在と、子供への愛着がなく、育児の困難さを感じている母親の存在、すなわち、母性意識の乏しい母親の存在を示していると思われる。

夫に対する気持ちでは、「味方であって欲しい」、「理解して欲しい」という気持ちを有している人が約90%みられ、夫に対する依存度はかなり高い。一方、「夫は子供の世話をよくする」と認識している人は約60%にしか過ぎないが、「心の支えになっている」、「側にいると安心」という気持ちを持っている人が約90%みられる。この結果は、夫への期待が満たされ、母親とその夫への愛着が形成されている割合が高いことを示している。

「生きる張合い」に関する項目で「はい」と答えた割合は、夫を対象とした場合の回答率の方が子供を対象とした場合よりも約2倍高い。しかし、これらの割合は、愛着に関する項目の割合よりも低い。「生きる張合い」と「愛着」とを区別して認識している母親の存在を示すものと考えられる。

実母に対する気持ちでは、「自分の母親のようにになりたい」、とするものは約50%であり、それを否定するものは約13%である。「母親と一緒にいると楽しい」とする割合は上記よりも約10%高くなっており、それを否定する割合も極めて少ない。実母をモデルとしない場合でも、実母への愛着を示している人がある。これは、産褥1カ月という重要他者からの育児の支援が最も必要な時期であることも影響していると思われる。

自己像では、あきっぱいと思う(26.8%)、よりも忍耐強いと思う(37.3%)の割合が約10%高い。育児には忍耐強さが要求されるので、この傾向は望ましいものといえよう。

現在の生活などについての認識に関する項目に対しては、「現在の自分に満足している」は53.6%と約半数にしか過ぎないが、「女に生まれてよかった」は71.8%、と高い割合を占めている。しかし、「私の幸せは夫次第」とする割合は過半数にも達していない。

子供に対する気持ちや夫や実母への気持ち、自己像、現在の生活への満足等との関連性を χ^2 検定によって検討すると以下のような傾向が認められた。

「子供が好き」という気持ちは、「子供と一緒にいると楽しい」、「子供の身の回りの世話が楽しい」など子供の世話に肯定的な気持ちと有意な関連があった($p<0.01$)。さらに「夫が育児の相談相手になってくれている」と夫の支援との間に有意な関連が認

められた($p<0.05$)。従って、子供への愛着は子供の世話を通し、夫の支援に支えられて形成されて行くものと考えられる。

「最近育児に疲れている」という項目は、「子供の世話が煩わしくなることがある」、「赤ちゃんが泣くことが多くて困る」などの子供や育児に対する否定的な気持ちと有意な関連が認められた($p<0.01$)。従って、育児疲れは、母性意識の形成に否定的に影響するものと考えられる。

「女に生まれてよかった」という項目は、「子供と一緒にいると楽しい」、「子供を生きる張合いとしたい」、「夫の身の回りの世話が楽しい」、「夫を生きる張合いとしたい」などの子供や夫への愛着を示す項目と有意な関連が認められた($p<0.01$)。伝統的な女性役割の受容は、子供や夫への愛着が形成されるような経験のもとに生ずるものと考えられる。

「現在の自分に満足している」は、既に説明した「女に生まれてよかった」という項目に関連の認められた子供や夫への愛着を示す項目(上述)と、有意な関連が認められた。その他に関連の認められたものは「夫が子供に関心を示してくれる」、「夫は心の支えになってくれる」($p<0.01$)、「夫が育児について相談相手になってくれる」($p<0.05$)等夫の支援に関する項目であった。一方、「現在の自分に満足」は、「最近良く眠れない」の項目の否定的回答と有意な関連が認められた($p<0.05$)。産褥1カ月間は、母親にとっては、家族の援助を受けながら家の中に閉じこもって、育児に追われており、家族以外の人々との交流の少ない期間である。そのような時期の母親の満足感には、子供や夫への愛着、夫の支援、睡眠が十分に取れる環境が大きく影響していることが考えられる。

2) 因子分析の結果

因子分析により表3のように7つの因子を抽出した。7因子の累積寄与率は17.6%であった。

第1因子は「子供と一緒にいると楽しい」、「子供の身の回りの世話が楽しい」、「私は子供が好きである」などの項目で因子負荷量が0.5以上であった。第1因子の構成項目は、産褥早期の「子供への愛着因子」の主な構成項目と同様なものが含まれていることから、³⁾産褥早期と同様に「子供への愛着因

表 3 因子負荷量

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子	第 6 因子	第 7 因子
子供と一緒に楽しい	0.7552	-0.0656	0.0510	0.0623	0.0047	0.1248	0.0508
子供の身の回りの世話が楽しい	0.7145	-0.0343	0.1537	-0.1802	0.1140	0.0358	-0.0415
私は子供が好きである	0.5233	0.0212	0.0441	-0.0584	0.0595	0.0617	-0.0088
私は他人の意見に左右されやすい	-0.0709	0.7371	0.1422	0.0139	0.0722	-0.0270	0.1239
私はあきっぽい性格である	0.0199	0.7146	-0.0264	0.0879	0.0058	0.0283	0.0810
私は忍耐強い性格である	0.0087	-0.7102	0.0961	-0.1315	-0.0439	0.1161	0.0131
危険や困難に尻ごみをする	-0.0616	0.7017	0.0927	0.1718	-0.1622	-0.0290	-0.0017
私は我がままな性格である	0.0088	0.5057	-0.1053	0.1610	-0.0031	0.0775	-0.0061
夫を生きるはりにしたい	0.1540	-0.0146	0.8240	-0.0472	0.1182	0.0222	0.0591
私の幸せは夫しだいである	0.1082	0.0187	0.7429	0.0234	0.1131	0.0011	0.0746
子供を生きるはりにしたい	-0.0422	0.0344	0.7268	0.0377	-0.0039	0.2985	0.0282
この子は手のかかる子である	-0.0820	0.0184	0.1412	0.7544	-0.0034	-0.0788	-0.0510
最近育児に疲れている	0.1642	0.1259	-0.0749	0.6382	-0.0513	-0.0229	-0.0079
赤ちゃんが泣くことが多くて困る	-0.0496	0.2338	0.0242	0.6426	-0.0793	0.0636	-0.0627
子供の世話が煩わしい	0.0621	0.1646	-0.2486	0.5108	0.1089	-0.2938	0.1528
最近よく眠れない	0.0134	0.0325	0.0025	0.5008	0.0407	0.0545	-0.1336
夫からきれいだと言われたい	0.1816	-0.0041	0.0969	-0.0571	0.7243	0.0267	0.2849
夫は私の味方であって欲しい	0.1507	0.0745	0.1301	0.0435	0.6983	0.0878	-0.0759
夫は私の髪型や服装に関心を示して欲しい	0.0459	-0.0353	0.0814	-0.0690	0.6649	-0.0250	0.3405
夫が私の気持ちを理解してほしい	-0.0546	0.0044	-0.0745	-0.0437	0.5747	-0.1011	-0.1158
夫が側にいると安心する	0.1084	0.0348	0.0063	0.0586	0.1552	0.7737	0.0198
夫が子供に関心を示している	0.2402	0.0212	-0.1123	0.1179	-0.0336	0.6898	0.0846
夫が育児の相談相手である	-0.0043	-0.0123	0.0619	0.0416	-0.0289	0.6561	-0.0243
夫は心の支えになっている	-0.0989	-0.0447	0.2423	-0.1274	0.1760	0.6425	-0.1066
夫は子供が好きである	0.0118	-0.0075	0.1311	-0.0058	0.1422	0.6039	-0.1103
夫は子供の世話をよくする	-0.0475	-0.0613	0.0787	-0.0020	-0.0472	0.5231	0.0084
自分の母親のような母親になりたい	-0.0472	0.0213	0.1153	-0.1003	0.1309	0.0786	0.7266
私はお母さん子であった	0.0431	0.0633	-0.0016	0.0180	0.0234	0.1317	0.7050
自分の母親と一緒にいると楽しい	-0.0957	0.0163	0.0929	-0.0405	0.1166	0.1756	0.6447

子」，と意味づけられよう。

第 2 因子では「私は他人の意見に左右され易い」，「私はあきっぽい性格である」，「私は忍耐強い性格ではない」，「危険や困難に後込みをする」，「私は我がままな性格である」などの未熟な性格を示す自己像に関する項目で，因子負荷量が 0.5 以上であった。この因子を構成している項目は，先の妊娠期，産褥早期の調査結果と同様であり，^{2) 3)} 未熟な性格因子と意味づけできる（表 4）。

第 3 因子では「夫を生きる張合いにしたい」，「私の幸せは夫次第である」，「子供を生きる張合いにしたい」などで 0.7 以上の高い因子負荷量とな

っていた。幸せは夫次第であるというような夫への強い依存感生きがいの対象を夫，子供とする気持ちに強く関連していることを示す因子と考えられ，「生きがい因子」と意味づけた。

第 4 因子は「この子は手のかかる子である」，「最近育児に疲れている」，「赤ちゃんが泣くことが多くて困る」，「子供の世話が煩わしい」，「最近よく眠れない」などの 0.5 以上の因子負荷量をもつ項目で構成されていた。この因子は，子供や育児への否定的な気持ちと睡眠不足感に関する項目で構成されている。従って第 4 因子は，「育児の困難感に関する因子」と意味づけした。この因子は子供や

育児への否定的な気持ちは睡眠不足と密接な関係があることを意味しており、子供への愛着は睡眠不足感を持つような生活環境の中では育ちがたい事を示唆していると考えられる。

表4 妊娠期～産褥1カ月の母性意識の関連因子対比表

妊 娠 期	産 褥 早 期	産 褥 1 カ 月
妊娠の受容	子供への愛着	子供への愛着
分娩に対する不安	分娩体験への否定的な観念	
夫への愛着	夫への愛着と支援	夫への愛着
夫の支援		夫の支援
未熟な性格	未熟な性格	未熟な性格
臆病な性格		
友人の支援		
伝統的な女性役割	夫・子供を生きがいとする	夫・子供を生きがいとする
母性行動	授乳を喜びとする	育児の困難感
	実母への愛着	実母への愛着

第5因子は「夫からされいだといわれたい」、
「夫は私の味方であって欲しい」、
「夫が私の気持ちを理解して欲しい」などの夫への愛着に関する項目で因子負荷量は0.5以上であった。これらの項目は妊娠期、産褥早期の夫への愛着因子とほぼ同様であることから、「夫への愛着因子」と考えた(表4)。

第6因子では「夫が側にいると安心する」、
「夫が子供に関心を示している」、
「夫が育児の相談相手である」、
「夫が心の支えになっている」、
「夫は子供が好きである」、
「夫は子供の世話を良くする」など夫の子供への愛着や支援に関する項目が因子負荷量0.5以上であった。これは、夫の子供への愛着と育児の支援には強い関連性があることを意味しており、子供への愛着のある夫は育児支援状態も良いこと、あるいは夫が育児支援のプロセスの中で夫は子供への愛着を形成していくとも考えられる。第6因子は、夫の子供への愛着と支援とは両方向の関連性のある事を示していると思われる。さらにこの因子に関係のある項目は妊娠期の「夫の支援」因子の主な構成項目と同様なものが含まれていることから、「夫の支援因子」と考えてよいだろう(表4)。

第7因子は、「自分の母親のような母親になりた

い」、「私はお母さん子であった」、「自分の母親と一緒にいると楽しい」などの項目で、因子負荷量は0.6以上であった。第7因子の構成項目は、産褥早期の「実母への愛着」の主な構成項目と同様なものが含まれていることから、産褥早期と同様に、「実母への愛着因子」と考えられる(表4)。

3) 分散分析の結果

因子分析の結果抽出された7因子について、学歴、本人並びに夫の職業、家族構成などの対象の属性別の差を検討するために分散分析を行った。その結果、第2因子は本人の職業、第3因子は本人の学歴、第4因子は夫の職業間に有意差が認められた。

第2因子は職業のある母親の方が職業のない母親よりも因子得点が低かった(図1)。

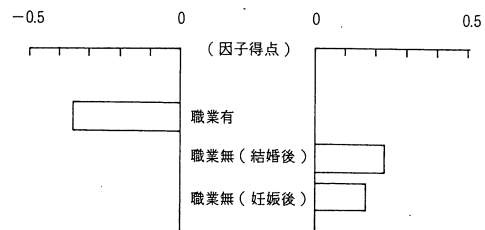


図1 第2因子と本人の職業
(産褥1カ月)

これは、未熟な性格という自己像をもつ母親は職業のある母親よりも、職業のない母親に多い事を示すものと考えられる。

第3因子は中学高校卒の母親の方が短大、各種学校卒や大学・大学院卒の母親よりも因子得点が高く、学歴が高くなるに従って、因子得点が低くなっていた(図2)。従って、夫や子供を生きがいとする母

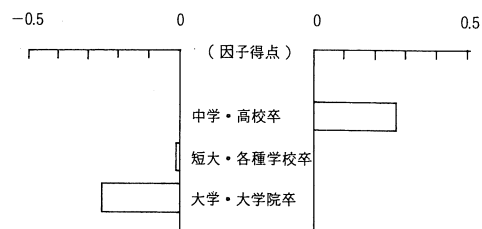


図2 第3因子と学歴(産褥1カ月)

親は、学歴が高くなるに従って、少なくなっている事を示しているといえよう。すなわち、学歴の高い母親は、子供や夫以外に生きがいを持っている人が

多いとも考えられる。

第4因子は夫の職業が管理専門職及びその他の方が、事務職の場合よりも因子得点が高くなっていた(図3)。このことから、夫が事務職である母親群は、育児に困難感を持つことが少ないものといえよう。育児の困難感、母親の睡眠不足と関連があることから、育児する母親の睡眠不足をもたらす生活環境には夫の職業も影響するものと考えられる。

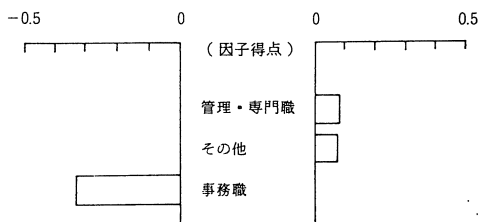


図3 第4因子と夫の職業(産褥1カ月)

V 結論

産褥約1カ月の初産婦の母性意識とそれに影響を与える要因とに関する結論は以下の通りである。

1. 母性意識の形成されている母親が80%以上見られるが、母性意識の乏しい母親も約20%認められる。
2. 母性意識の形成に肯定的に関連している要因は夫・実母への愛着、夫の支援である。また、それらの要因は現在の自分への満足感にも有意な関連がある。
3. 母性意識の形成に否定的に関連しているものは睡眠不足や育児疲れである。

4. 「女に生まれてよかった」という意識は子供・夫への愛着と有意な関連がある。

5. 因子分析の結果抽出された因子は、「子供への愛着」、「未熟な性格」、「子供や夫を生きがいとする」、「育児の困難感」、「夫への愛着」、「夫の支援」、「実母への愛着」、などの7因子である。

6. 抽出因子の各対象属性間では、未熟な性格因子については職業の有無により、夫・子供を生きがいとする因子については学歴により、育児の困難感についての因子では夫の職業により、それぞれ有意差が認められた。

VI 引用文献

- 1) 松岡恵他：成熟期未婚女性の母性意識に関する因子－私立看護大生へのアンケート調査の多変量解析－，母性衛生，24(3, 4合併号)：221, 1983.
- 2) 松岡恵他：妊婦の母性意識に関与する因子について，母性衛生，26(3)：353, 1985.
- 3) 新道幸恵他：産褥早期の褥婦の母性意識に関与する因子について，母性衛生，26(2)：205, 1985.

VII 参考文献

- 1) ヘレーネ・ドイッチュ(懸田克身，原百代訳)：母親の心理2 生命の誕生，日本教文社，昭和39年，初版
- 2) ボールビー(黒田実郎訳)：母子関係の理論1－愛着行動，岩崎学術出版，昭和51年，初版
- 3) 小島謙四郎：乳幼児の母子関係－アタッチメントの発達，医学書院，1981. 初版
- 4) 柳井晴夫，高木広文編著：多変量解析ハンドブック，現代数学社，1986.